

演目解説

仕舞・一調

難波・四天王寺で物乞いに落ちぶれた名家の青年が、心のうちにすべてを見る幻覚を舞う(弱法師)。伊勢外宮の神官が頓死の間に見た地獄のさまを舞う(歌占)。六十を過ぎて髪を黒く染め討死した老武者の意地を示す(実盛)。老柳の精が清水観音や『源氏物語』など古今の柳にまつる故事を舞う(遊行柳)。牛若丸にあえなく討たれる老盗の最期を語る(熊坂)。

能(盛久) 平家滅亡後、捕えられた平盛久は処刑のため鎌倉へ送られる。日ごろ清水寺の本尊・千手観音を信仰する盛久は、護送役・土屋の厚意によって、離京前に清水へ告別の参詣を果たす。東海道を下り、鎌倉の牢内にあっても法華経誦に専念する盛久はある夜、不思議な夢を見る。翌朝、いよいよ最期の時が迫る。由比ヶ浜の刑場に引き出され、

盛久の父・盛国(一一一三〜八六年)は清盛の最側近として大切にされた重臣だった。彼が奉行となつて厳島神社奉納の国宝『平家納経』が制作された。『法華経』『阿弥陀経』『般若心経』からなる装飾経の最高精華であり、平家一門の書写による。うち、『法華経』第十七品・分別功德品が当時五十二歳の盛国自筆である。平家滅亡後、捕縛された盛国は鎌倉に送られたが、法華経誦誦に日を送り、自ら食を断つて死んで死んだ。頼朝はその態度を哀惜したといふ『吾妻鏡』(文治二年七月二十五日条)。

盛久は盛国の八男である。長門本『平家物語』によると、平家滅亡後の潜伏中に捕らえられた。盛久も父譲りの信心深い人からで、清水寺本堂に自ら寄進した千手観音像を安置したほどであったという。免刑の奇跡が起きたのは父の死の直前・文治二年六月二十八日。頼朝ではなく北条政子の霊夢によるものときされる。盛久の姿には、篤信の偉人だった父・盛国の姿も重ね合わせられている。盛久の肩書「主馬判官」は、父の任官した官職でもある。

ワキの土屋三郎宗遠(一一二八?〜一一八八年?)は石橋山拳兵以来の頼朝の重臣で、その兄・土肥実平は能(七騎落)のシテである。喜多流はワキの名ノリから始まるが、本来は観世流のように護送の最中「いかに土屋殿に申すべきことの候」と申し出る盛久のセリフから始まる斬新な始曲だった。東海道を下る長大な謡は古曲(東国下)の趣向の再生。以下、巧みな展開と晴れやかな結末に、歌舞の要素を最大限に生かした劇能の真骨頂が楽しめる。

(明星大学教授・演劇評論家)

斬首の太刀が振り上げられても誦経を続ける盛久……が、その刹那、処刑人は目がくらみ、思わず取り落とした太刀は寸断されていた。時を同じくして幕府から急使が至り、処刑は取り止めとなる。

実は、源頼朝が前夜見た夢「八十歳を超えた老僧が篤信の盛久の助命を説いた」……これは盛久自身の霊夢と一致するものだった。観世音菩薩が老僧の姿を借り、絶体絶命の盛久を救ったのだ。晴れて免罪され、釈放された盛久。頼朝の御前で報恩の舞に興じ(男舞)、意気揚々と退出する。

世阿弥の実子・観世十郎元雅の書いた傑作。(隅田川)でも(歌占)(弱法師)でも、元雅の能には「奇跡が現前する」驚きがクライマックスをなす。世阿弥の決して採らなかつた大胆な手法である。千手観音、楊柳観音、如意輪観音など、観音像には多種多様な種類がある。これは「観世音菩薩は三十三身に变化してあらゆる人々のあらゆる願いを叶える」功德を具現化したもの(「三十三」は実数ではなく、「三×三三」一桁最大の九)であるところから「無限」を示す。観音信仰の本拠は『法華経』第二十五品(品/ほん)にその末尾「世尊偈」と呼ばれる一段は、古来、最も愛誦・信仰された名経の筆頭である。どんな危機に臨んでも観音菩薩は必ず救いの手を差し伸べると説く「世尊偈」のうち、「或遭王難苦。臨刑欲寿終。念彼観音力。刀尋段段壞(刑罰に遭い、生命の危機に臨んでも、観音の名を念ずれば、処刑の刀は寸断される)」の文言をそのまま舞台化する趣向がこの能のクライマックスをなしている。

【お申込み】

■電話予約:塩津能の會事務局 03-3330-6803

■インターネット予約:喜多能楽堂ホームページ <http://kita-noh.com/ticket>
※クレジットカード決済・コンビニ購入受取が可能です。 ※要事前登録・無料

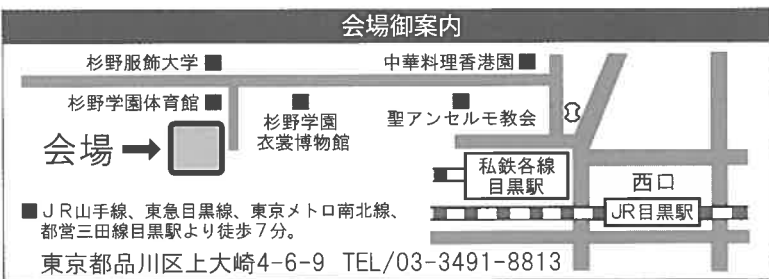
■オフィシャルサイト: <http://www.shiotsu-noh.com>

くわしくはこちらへ→



■主催:一般社団法人 塩津能の會

鑑賞券	
S/10,000円(正面指定席)	A/8,000円(正面指定席)
B/7,000円(脇正面指定席)	C/5,000円(中正面指定席)
D/3,000円(座敷自由席)	E/3,000円(二階自由席)



塩津能の會 第二回 研鑽能

令和4年7月24日(日)午後2時始
十四世喜多六平太記念能楽堂

塩津能の會

第二回 研鑽能

令和四年七月二十四日(日)二時始
十四世喜多六平太記念能楽堂

講演 村上 湛

(二時三十分)

弱法師

金子敬一郎

谷 友矩

歌 占

塩津 圭介

内田 成信
狩野 了一

実 盛

佐々木多門

狩野 祐一

一調

夜討曾我

大島 輝久

小鼓 久田舜一郎

遊行柳

狩野 了一

塩津 圭介
佐々木多門

熊 坂

内田 成信

金子敬一郎
大島 輝久

仕舞

【休憩二十分】

(三時四十分頃)

盛 久

シテ(平盛久) 塩津 哲生

能

ワキ(土屋三郎) 宝生 欣哉

大鼓 亀井 忠雄
小鼓 久田舜一郎

笛 松田 弘之

ワキツレ(太刀取) 則久 英志

”(興界) 野口 能弘

”(”) 御厨 誠吾

間狂言(土屋下人) 高澤 裕介

狩野 祐一

大島 輝久

後見 香川 靖嗣

佐藤 陽

金子敬一郎

佐々木多門

塩津 圭介

狩野 了一

地謡

谷 友矩

内田 成信

(終演予定五時頃)